

穂村弘の短歌論 W.H<国①ゼミ>

1. はじめに

穂村弘は歌集「シンジケート」で知られる現代短歌の中心人物で短歌の中にニューウェーブを持ち込んだ1人である。現代の人々から人気を得る穂村弘の短歌の特徴を明らかにする。

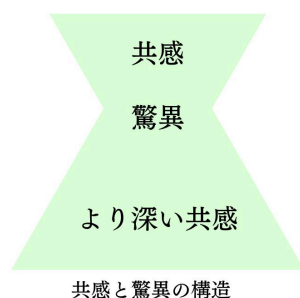
2. 調査方法

まず調査①で穂村弘の著作物や論文から短歌の構造を明らかにする。その後、明らかにした内容をもとに短歌を分析する。調査②では穂村弘の短歌が持つ特徴を明らかにする。

3. 分析と考察

3.1 調査① 穂村弘の短歌の構造

穂村は著書の中で人を感動させるような短歌が持つ要素として共感と驚異を挙げている。共感とはシンパシーの感覚「そういうことってある」「その気持ちわかる」と読者に思わせる力で、驚異とはワンダーの感覚「今までに見たこともない」「なんて不思議なんだ」という驚きを読者に与える力である[1]。特に一流の詩人が大切にするのは驚異の方で、これは人を感動させるために必要な要素だと語っている。また、驚異そのものに現実性は関係ないとも語っている[1]。穂村は共感と驚異の構造について、共感の感覚のあとに驚異があり、その後広く深い共感が広がって感動に繋がるとのべている[1]。



また、穂村弘の短歌は過去を感じるという意見が見られる。「現在形で書かれた作品だと

しても、それは過去の恋への呼びかけなのだ。」「[4]そして、穂村弘自身も「人の心は時間を超える。けれど、現実の時は戻らない。目の前にはいつも触れることのできない今があるだけだ。(中略)私の言葉はまっすぐなときの流れに抗おうとする。」「[1]と述べている。このことから、穂村弘が目指す広くて深い共感とは、ノスタルジーのことであると考えられる。

3.2 調査② 穂村弘の短歌の特徴

つぎに以下の書籍から穂村弘の短歌に対する批評や穂村弘からの自身の短歌に対する評価を読み解き短歌に特徴を探る。

- ・穂村弘(1990)『シンジケート』の栗、沖積舎
 - ・穂村弘(2013)『短歌という爆弾一今すぐ歌人になりたいあなたのためにー』小学館
 - ・田島安江、藤枝大(2020)『現代短歌のニューウェーブとは何か?』書肆侃侃房
- ここからわたしが読み解いた穂村弘の短歌の特徴として以下のものが挙げられる。

3.2.1 短歌の定型を崩す傾向がある

例: 雨の最初のひとつぶを贈る起きぬけは声が全然でないおまえに(穂村弘)

短歌の定型を崩すことへ抵抗がない[2]より短歌の定型(5・7・5・7・7)を崩す傾向がある。短歌の定型に当てはまらない字遊びのような自由さがあるといえる。

3.2.2 対話体だが、一方的な会話で、受身がどこまでも受身

例: 「さかさまに電池を入れられた玩具の汽車みたいにおとなしいのね」(穂村弘)

会話が並んでいて、対話をしているはずなのに、お互いが理解しあって対話しているかどうかさえわからないと言うものが出てきている。(萩原、1991)[2]、玩具のようにどうにでもなる非人称化した「おまえ」(小笠原、1991)[3]

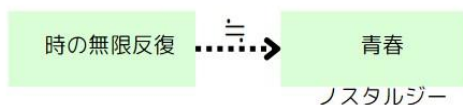
対話体の短歌はその短歌の中の人物が読者に一方的に語りかけて、受け手がどこまで

も受け身でしかないという特徴がある。対話体の短歌はその短歌の中の人物が読者に一方的に語りかけて、受け手はただどこまで行っても受け身でしかないという特徴がある。

3.2.3 徒労のような何も起こらない無限反復例: 曲がっても曲がっても曲がっても曲がっても眩しい夕陽が正面にある(穂村弘)

始めも終わりもない無限反復を繰り返すだけだ(小笠原、1991) [3]のように「わたし」に対しての決定的なできごとが起こらない、ずっと続くループのような無限感を感じさせる短歌も多くみられる。

3.2.1と3.2.2の共通点はどちらも「私」受け手への介入がほとんどないということである。3.2.1は作者が短歌という31音のなかで言葉あそびをしているだけで、私たちに何か訴えかけようとしていない、3.2.2は受け手に何か反応を要求しない、「わたし」へ何かを訴えかけてこない。これら二つの要素が3.2.3の徒労のような何も起こらない無限反復を感じさせていると思われる。時の無限反復とは「私」に対して決定的な出来事が起きないことだ。また穂村弘は青春とは現実に対する決断や意思決定を強要されず不定形でいることができる時期であると述べている。私はこれらの要素が同じような性質を持っていると考えた。



よって時の無限反復の「わたし」に対して決定的な出来事が起きない浮遊感は宙ぶらりんな青春の時期を感じさせる。さらに青春は懐かしいという気持ちのノスタルジーを引き出すと考えられる。

5. 結論

穂村弘は共感の中に驚異を挟むことで短歌を異化し、より広く深い共感へ導こうとしている。また穂村の特質として、穂村の目指す広く深い共感とはノスタルジーのことである。ノスタルジーを生み出す要因としては、モラトリウムを想起させる時の無限反復である。また、「わたし」に決定的な出来事が起こらない、時空のメリハリのない無限反復を生み出す要素として①短歌の定型を崩す傾向がある、②対話体だが、一方的な会話で、受け手がどこまでも受け身、が挙げられる。どちらも「わたし」に対して積極的な介入が見られず、一方的で、孤独な作業、または操作である。

6. 今後の課題

穂村弘のみの調査となってしまったので、共感と驚異を引き起こす要素について、他の歌人との比較をしたい。

謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方のご協力を賜りました。指導員の安里先生、ゼミ担当の園部先生、筑波大学の平井先生、また、国際ゼミ①の仲間へ深く感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 穂村弘(2013)『短歌という爆弾ー今すぐ歌人になりたいあなたのためにー』小学館.
- [2] 小池光、荻原裕幸、加藤治郎、藤原龍一郎(1991)「現代短歌のニューウェーブ 何が変わったか、どこが違うか」田島安江、藤枝大『現代短歌のニューウェーブとは何か?』p14-40、書肆侃侃房.
- [3] 小笠原賢二(1991)『短歌往来8月号』ながらみ書房.
- [4] 穂村弘(1990)『シンジケート』(本体と栞) 沖積舎.